

CATCH JAPAN (J-Sports)

2020年12月25日放送

モニター感想

J-Sportsのセグメントを見たあと、本庄市とホストタウンについてどのような印象を持ちましたか？

- ◆本庄市とホストタウンについて良い印象を持った。18世紀に盲目の国学者が誕生した町だからこそ、視覚・その他の障害者に共感し、共生社会を目指すのは、本庄市の住民にとって当然のことなのだ。ブラインドサッカー・トルコ代表チームのホストタウンになることは、ブラインドサッカーをはじめ、共生社会への認識の他、今後のトルコとの経済的文化的関係にも繋がる。特に、子供たちが敬意と共感を学ぶ取り組みが気に入った。ブラインドサッカーという楽しいアクティビティを通じて、障害者が直面する困難に気づくことができる。私はオリンピックを熱心に見るほうではないが、今回の番組を通じて、パラリンピック、特にブラインドサッカーに興味を持った。2021年の東京オリンピックの後も、次のホスト国がこのホストタウンの取り組みを続けることを望んでいる。【インド・20代男性・学生】
- ◆本庄市の人々には、素晴らしいホスピタリティがあると思った。美しい風景の本庄市で、選手たちは充実した時間を過ごせることだろう。選手たちに必要な施設は全て揃っているし、気候も良さそうだ。オリンピックを支えることで、本庄市の人々は自信をつけることができ、その自信は今後も様々な分野で役立つと思う。【スリランカ・20代男性・学生】
- ◆様々な人々と視覚障害者を引き合わせ、新しい視点と理解を獲得する崇高な取り組みだ。それは視覚障害者をないがしろにするのではなく、サッカーを通じて、彼らと共存することを目的としていた。長い時間をかけ普及に取り組み、他国との相互協力へと繋がっている。スポーツを介して社会の一員となる機会を視覚障害者に提供するという目的を通じて、国と国が一つになっている。この取り組みは、単に得点するためにボールを蹴るだけでなく、思いやりへの誤解と偽善を一蹴するものだ。こうした小さなステップが、相互協力と人類愛へと繋がっていく。【フィリピン・40代男性・主夫】
- ◆オリンピックの延期は、2020年で最も悲痛な出来事だっただろう。二年前、上司と二人でオリンピックのボランティアを計画していたが、開催が延期となり非常に落胆した。もう終わりだと思っていたが、こうした国同士の協力が今なお続けられていることを知り、とても嬉しく思った。ホストタウンは、約束を守り続けている。子供たちが、幼いうちから、共生と約束を守ることを学んでいる点にも感銘を受けた。本庄市は、コロナ禍にありながらアイデアやリソースを独占することはせず、来日すらできないトルコの人々への協力を続けている。日本とトルコが連携し、障害者のスポーツ普及に努めていることに、最も心を打たれた。子供たちに共生について教え続ければ、本庄市は子育てに適した思いやりあるコミュニティとなり、他でないがしろにされてきた人々の安らぎの場となるだろう。私は、日本人はこれまでもずっと障害者と共存してきたと思っている。塙保己一の記録は、コミュニティの支えがあったからこそ、偉業を成し遂げられた

証だ。番組が歴史的背景にも触れることで、外国人だけでなく、日本人自身もその行動の裏にあるものを理解できただろう。心温まるストーリーがこれまで以上に必要とされている今、画面を通してではあるが、本庄市という素晴らしい場所を訪れた気持ちになれた。今回のような出来事がもっと増え、住民と外国人が互いをさらに理解し合えたら良いと思う。 【フィリピン・30代女性・編集者/ライター】

- ◆私は、本庄市について、珍しいスポーツを推進すると同時に、外国と日本、そしてアスリートと障害者間の交流も奨励する、ユニークなホストタウンという印象を持った。番組を視聴するまで、視覚障害者がサッカーのような肉体的に過酷なスポーツに参加できるとは思っていなかったが、このユニークなサッカーは、全てを可能にしていた。また盲目の学者の歴史は、本庄市がブラインドサッカーのホストタウンとして最も適していることを示すと同時に、視覚障害者に希望を与えている。障害のない子供たちにブラインドサッカーを体験させる取り組みは、ユニークかつ興味深く、スポーツをする視覚障害者の励みとなるだろう。目隠しをしてブラインドサッカーをする子供たちも、幼いうちから障害者を理解することができる。金属の粒が入った特製ボールは画期的だ。視覚障害者も目隠しをした健常者も楽しめると同時に、人々を結び付け、スポーツもできる。日本だけでなく、世界中の国々で、本庄市のようなホストタウンが誕生することを望んでいる。 【ブータン・40代女性・自営業】

- ◆内閣官房によるホストタウン・イニシアチブは、日本の自治体と東京オリンピック・パラリンピック参加国との交流を目的としている。私が住むキャンベラは、1993年に奈良県と提携しているので、ホストタウンの取り組みには、個人的にも大変興味がある。トルコと提携している本庄市は、ホストタウンの一つとして注目を集めている。トルコブラインドサッカー協会と日本ブラインドサッカー協会は、長年に渡り良い関係を築いており、2018年3月には、本庄市でブラインドサッカートーナメントを開催した。本庄市の住民もブラインドサッカーの練習を続け、2020年東京パラリンピックに先駆けて、トルコ代表チームとの関係を深めることができた。この地域の情熱は、江戸時代に本庄市で生まれた盲目の学者・塙保己一に由来している。しかし皮肉にも、トルコ代表チームは、予選敗退によりパラリンピックに出場出来なくなってしまった。それでも本庄市は、トルコ料理イベント等を通じて、トルコとの関係を続けてきた。本庄市オリンピック・パラリンピック支援室・田島隆行室長が言うように、本庄市はブラインドサッカーのようなアクティビティを通じて、本当の共生社会へと成長した。駐日トルコ大使も2020年12月に本庄市を訪問、本庄市はパラテコンドー代表チームの合宿地となって、トルコとの関係を再構築しようとしている。パンデミックの中でのこうした挑戦は、本庄市とトルコの関係性をさらに深めた。ホストタウン・イニシアチブは、本庄市とその住民にとって、新しい国際的つながりを築いているように思う。今回のセグメントを通じて、東京オリンピック・パラリンピックが、一度限りのイベント以上のものであること、そして日本や日本国民にとって世界各国との関係を築く最大の機会であることを理解できた。

【オーストラリア・30代女性・自営業】

- ◆社会の底辺に追いやられがちな人々との障壁を取り払う本庄市の取り組みに、好感を持った。自閉症の息子(24歳)を持つ父親として、幼少期や少年期に多くの機会を失った息子を見てきた。とても辛か

った。しかし、番組は、全ての人々が共生し助け合う方法があることを教えてくれた。本庄市は素晴らしい。
【アイルランド・50 代男性・主夫】

◆共に体験することを学ぶ文化は素敵だと思う。特に幼少期であればなおさらだ。子供たちにブラインドサッカーを教える取り組みも素晴らしい。幼いうちから、チームワークと思いやりを学ぶことができる。こうした取り組みが、差別を減らし、人々の理解を深めてくれたらと願う。
【アイルランド・20 代女性・学生】

◆このセグメントは非常に上手く構成されていた。ブラインドサッカー・トルコ代表チームのホストタウンであることに加え、本庄市で誕生した盲目の学者とブラインドサッカーの繋がりを生かしていたからだ。日本人のホスピタリティとも関連するこの歴史的繋がりは、障害者と健常者のほか、地元住民と外国人の共生にも広がっている。さらに、十分なスポーツ施設だけでなく、代表チームにくつろいでもらえるような環境を提供する日本当局の思いを映し出していた。東京オリンピック・パラリンピックが延期となる中、ホストタウンについての同様の番組を今後も期待している。
【イギリス・20 代男性・学生】

◆本庄市の一部分にしか焦点を当てていなかったため、客観的な印象を伝えるのは難しいが、ホストタウンとして、快適で多様性のある場所と感じた。2012 年ロンドンオリンピックの際、私が住むバジルドンは、水泳・日本代表チームのホストタウンだった。しかし地元新聞の記事に一度掲載されたくらいで、そのことについての詳細も、本庄市のような取り組みも伝えられることはなかった。【イギリス・60 代男性・無職】

◆本庄市は、刺激的で開放的な場所のように感じた。ホストタウンの取り組みは、互いの文化を学び、新しい友人を作る素晴らしい方法だと思う。2012 年ロンドンオリンピックの際に、ロンドンも同様の取り組みを行っていたらと思う。そうすれば、私も新しい文化やスポーツを学ぶことができただろう。
【イギリス・30 代女性・ライター】

◆受容や思いやりの心を育てながら、障害者への理解を深める若者たちへの取り組みは素晴らしい。私は、相互理解は、障害者と健常者が前向きな環境で混ざり合うことでしか実現しないと思っている。学校給食にトルコ料理を出すことも含め、トルコ代表チームとのつながりを利用して、子供たちに異なる文化を体験させるのは良いことだ。ブラインドサッカー・トルコ代表が予選敗退しパラリンピックへの参加資格を失ってしまったが、これまでのトルコとのつながりが、パラテコンドー代表チームの事前合宿の申し出という形で実を結んだことを、本当に嬉しく思う。塙保己一や彼が残した多くの文献は興味深く、そのような学者を生み出した本庄市がブラインドサッカーチームのホストタウンになったことに感銘を受けた。ホストタウンのコンセプトは、素晴らしい。異なる文化の相互理解を促すものを全てを称えたい。
【イギリス・50 代女性・デザイナー】

◆盲目の学者が誕生した地である本庄市が、パラテコンドー・トルコ代表チームをサポートするのは、とても良いアイデアだと思う。通常、ホストタウンは、異なる国の人々がくつろげるよう歓待し、人々と深い絆を

築くことができる。多くの友情関係は、オリンピック・パラリンピック大会終了後も続くことだろう。

【オーストリア・40代女性・主婦】

- ◆番組が、本庄市を訪れたいくなるような十分な情報を提供していたかどうかは何とも言えないが、紹介されていたホストタウンは、開放的で魅力的な町だった。そういう意味では、今後訪れてみたい町かもしれないが、これほど短い時間では、本庄市が観光客にとって魅力的な場所かはわからない。

【オランダ・50代女性・編集者】

- ◆こうしたホストタウンの人々は、長期に渡る関係構築を含め、海外との交流に対し、とても寛容でフレンドリーに見える。こうした取り組みが、今後、異なる文化間の長期的な理解へと繋がることを望む。

【スペイン・30代男性・編集者】

- ◆本庄市の一部しか見ていないが、共生社会を構築しようとしている町のようだ。本庄市の住民にとって素晴らしいことだと思うが、観光推進に役立つかどうかはわからない。【フランス・40代女性・編集者】

- ◆共生社会と多様性と多文化主義を促進するホストタウン・本庄市について、よく理解することができた。この街の合言葉は、間違いなく「共生」だ。番組からもわかるように、晴眼者と視覚障害者の協力を通じて、良い結果が生まれている。本庄市の小学校でのブラインドサッカー教室は素晴らしい。晴眼者の子供たちが視覚障害者の立場となることで、交流しながら、理解、サポート、思いやりを育むことができる。トルコのホストタウンとして、本庄市は日本とトルコの人々との間に、強い絆を作り出している。この交流は、東京オリンピック・パラリンピック終了後も続くだろう。ホストタウン・イニシアチブは、合理的で生産的な取り組みだと思う。日本の自治体とオリンピック・パラリンピック参加国は、長期に渡る関係を築くことができ、双方にメリットがある。参加国は、日本文化を体験し、地元の料理を楽しみ、互いの文化を紹介するイベントに参加できる。ホストタウンは、地域の活性化につながるだろう。私が知る限り、立川市と白石市がベラルーシのオリンピック・パラリンピック選手のホストタウンとなる計画を立てているようだ。日本人が私の国に慣れ親しむと同時に、スポーツ、文化、経済といった様々な分野で交流できる最高の機会となることだろう。2021年には実現できることを期待している。

【ベラルーシ・30代女性・ホテル業】

- ◆ホストタウンの取り組みとオリンピック委員会を高く評価したい。文化交流だけでなく、障害者との共生社会に尽力している。共生を通じた国際的な関係を構築する本庄市の努力は、非常に前向きなメッセージを示している。

【UAE・30代男性・マーケティングコンサルタント】

- ◆番組を視聴し、本庄市についてネットで調べた。小さな町だが、それは大木の種と同じことだ。本庄市の相互協力の未来は、明るく見える。

【トルコ・50代男性・無職】

- ◆本庄市のセグメントは非常に良かった。ホストタウン・イニシアチブは、私を知る取り組みの中でも最高のものだ。国際協力、共生、教育が一体となっている。日本の思いやりと寛容さを体現するこのような取り組みは、もっと奨励されるべきだ。この取り組みに関するセグメントをもっと視聴したい。他の国も追随するかもしれない。 【ドミニカ共和国・30 代男性・スペイン語講師】

- ◆山の近くに位置する本庄市は、気候も良さそうだ。訪れる価値がある場所だろう。イベントへの取り組みが素晴らしい。外国人を受け入れることで、子供たちは、本庄市にいながらにして、世界を知ることができる。 【パナマ・40 男性・システムエンジニア】

- ◆「ホストタウン」というアイデアが気に入った。アメリカでいう「姉妹都市」を思い出させる。アメリカでは多くの都市が、他の国に姉妹都市を持っている。その内容については良く知らないが、フレンドリーで外交的なつながりを確立するためのものだろう。また、今では廃れてしまった「ペンパル」も思い出した。子供の頃、私には韓国にペンパルがいて、彼女や彼女の国について多くを学んだ。手紙と一緒に写真を送り合ったものだ。私はいつも、赤と白と青の線が入った国際郵便用の封筒が届くのを楽しみにしていた。ホストタウンに話を戻すと、日本は他の国々と良い関係を築いていると思う。こうした関係構築は、グローバルな政策では難しいが、町レベルの小さなスケールなら有効だ。 【アメリカ・30 代男性・医療関係】

- ◆本庄市は良いところのようだ。人々はとても明るく良心的に見える。パラリンピックトルコ代表チームを理解するための住民の努力に感銘を受けた。ホストタウンのアイデアが良い。オリンピックの目指すところと同じだ。ホストタウンのコンセプトは、文化交流や視野を広げる機会を提供するだけでなく、経済貿易にもつながる可能性がある。ホスピタリティを提供する以上の本庄市の努力に驚かされた。 【アメリカ・40 代男性・企業家】

- ◆日本のホストタウンのアイデアは非常に優れていると思う。住民やコミュニティが視野を広げる素晴らしいやり方だ。双方が本物の絆を構築できるし、交流を通じて互いを高め合うこともできる。もしこれが東京や横浜や大阪といった国際都市だったら、様々な人々に出会いながら、より多様性豊かな体験ができるかもしれないが、ややうわべだけのものになってしまうだろう。一方、本庄市のようなホストタウンなら、コミュニティ全体で迎え入れてくれる。 【アメリカ・50 代男性・保険関係】

- ◆ホストタウンについての番組を視聴したことがなかったので、新鮮だった。こうした繋がりがどのように構築されるのか、どれほどの準備が必要なのか、もっと知りたいと思った。 【アメリカ・50 代男性・作家】

- ◆本庄市は、とても友好的な町のようだ。他国との関係を築くホストタウンのアイデアは、交流プログラムとして優れた方法だ。双方にとって、互いの文化について学ぶ素晴らしい体験となるだろう。本庄市を始めとする日本の自治体が、国際平和・交流に貢献していることを嬉しく思う。 【アメリカ・60 代男性・映像作家】

- ◆アスリートや運動施設であまり知られていない本庄市が、国際スポーツ開催地として尽力する様子に感銘を受けた。ブラインドサッカー・トルコ代表との当初のプランは、スポーツ活動の経験を積み、地位を向上させるために有効なスタートだったが、残念なことに、トルコ代表は予選敗退してしまった。現在、パラテコンドー・トルコ代表の事前合宿誘致に努める本庄市は、経験不足というところからはステップアップしたかもしれない。本庄市の努力や根気強さには敬服するし、成功を望んではいるが、やや遅きに失した感は否めない。
【アメリカ・70 代男性・無職】
- ◆本庄市は、自分たちの過去とコミュニティを結び付け、未来へと繋げている。そうした理解が、コミュニティの絆を深めているようだ。いつか本庄市を訪れ、自分の目でその町を見てみたい。
【アメリカ・20 代女性・IT サポート】
- ◆本庄市は、ホストタウンとして素晴らしい働きをしていると思う。「ホストタウン」は一時的なものではあるが、このような経験は、日本、そして世界中の社会の向上へとつながっている。日本中のホストタウンが、本庄市を手本とするべきだろう。
【アメリカ・20 代女性・飲食業】
- ◆本庄市についても、オリンピックのホストタウンについても全く知らなかった。1984 年以來、私の町でオリンピックは開催されていないので、アスリート達が開催地の外で滞在する必要性について考えたこともなかった。オリンピック開催は、壮大な取り組みであり、開催国にとってどれほど栄誉あることか、よく理解することができた。
【アメリカ・30 代女性・会社員】
- ◆小学校給食にトルコ料理を出すほど、トルコ文化の理解を育んでいる本庄市は素晴らしい。世界中の人々が互いに良い関係を築くことは重要であり、オリンピックがその求心力となっていると思う。日本が、ホストタウン・イニシアチブを始めたことは興味深い。このイニシアチブについてもっと知りたい。他の年のオリンピックでも、オリンピック委員会は同様の取り組みを推進するのだろうか？
【アメリカ・30 代女性・大学講師】
- ◆ブラインドサッカーを通じて、他国と深い絆を構築する本庄市に、深く感動した。視覚障害者ではない子供たちは、ブラインドサッカーを学ぶことで、理解と思いやりを育むと同時に、スポーツを通じたチームワークも学ぶことができると思う。
【アメリカ・40 代女性・会社員】
- ◆日本を訪れる観光客は、本庄市と彼らの取り組みを見るべきだ。セグメントを視聴し、本庄市と当局者への敬意と称賛の気持ちが大きくなった。共生社会を促し、子供たちにバリアフリーを教える地元小学校の取り組みは、素晴らしい。日本で支持を集めるこうした斬新なアイデアは、驚くほど受け入れられている。
【カナダ・40 代男性・エンジニア】

◆本庄市がセグメントの中心ではなかったため、あまり強い印象は感じられなかった。しかし、素晴らしい取り組みを行っていたので、そういう意味では前向きな印象を持った。歴史とのつながりも興味深かったが、皆でパラリンピック競技を推進している、今現在の努力を称賛したい。【カナダ・30代男性・会社員】

◆本庄市は、盲目の有名学者が生まれた歴史ある町であり、視覚に障害のあるアスリートのホストタウンとなることで、彼の貢献を称えている。ホストタウンとしての準備に、相当の労力が必要とされることは明らかだ。視覚障害者への理解を促し、共生社会と文化共有を推進する、素晴らしい取り組みだ。

【カナダ・40代女性・会社員】